



国民スポーツの新しいかたち

津市長 前葉 泰幸

令和3年の幕が開け、いよいよ三重とこわか国体・とこわか大会開催の年となりました。

戦後の荒廃と混乱の中、スポーツを通して勇氣と希望を見出し社会に活力を取り戻そうと始まった国民体育大会は、その後、天皇杯・皇后杯の授与、都道府県対抗・持ち回りでの開催方式が確立し現在は2巡目に入っています。

■時代の転換点で国体開催

1巡目の第30回国体が三重県で開催されたのは昭和50年。第1次オイルショックにより狂乱物価ともいわれた激しいインフレが日本経済を直撃し、戦後初めて経済成長率がマイナスに転じた翌年のことです。高度経済成長時代が終焉を迎え、かつてない厳しい経済情勢のもとで開催した三建国体は、華美を求めず「ムダを省いたあたたかい国体」をモットーに工夫と創意を凝らして国体の原点を追求した大会となりました。

歴史の巡り合わせとでも申しましょうか、新型コロナウイルスの感染拡大により昨年開催を予定していた鹿児島県が3年の延期を余儀なくされたことから、今年、三重県はコロナ禍で初めて国体・全国障害者スポーツ大会を開催することになります。

■ウィズコロナ対応へ 計画見直し

昨年6月、緊急事態宣言解除後もコロナ収束の見通しが立たずリハーサル大会が次々と中止に追い込まれる中、県内最多の9競技11種目が開催される津市は安全・安心な大会運営のためこれまでの計画を根本から見直すことにしました。

津市産業・スポーツセンターのサオリーナは3,000㎡を上回る広いアリーナと3,000人の観覧席を擁する最新の施設です。競技会場の選定時には多くの種目から希望が寄せられ、国体史上初めて同一会場でバスケットボールとバレーボールを会期の前半と後半に分けて開催することが決まっていました。さらに、隣接するメッセウイング・みえにマットや畳、仮設スタンドの観客席を設営し、レスリングと柔道の開催を予定していました。

当初は津市産業・スポーツセンター内の2つの会場で4種目もの競技が開催されることが話題となり、大勢の来場者で盛り上がるのが期待されていたものの、コロナ禍においてはそれが逆に密を避けられない懸念材料となってしまいます。

そのため、津市の国体局は選手同士の交流や観客の数を抑制してでも各競技の日程が重ならないようにすることを最優先に、4競技全てをサオリーナで単独に開催できるよう、三重県に競技会場の変更と会期前の競技開催を提案しました。

国体競技は原則として9月25日～10月5日の会期内に開催することが求められています。津市の

異例の変更案は、ウィズコロナ時代に全ての大会参加者の安全を確保する例外的な措置として三重県と日本スポーツ協会に承認され、会期前の9月11日～14日にレスリングを、18日～20日に柔道をそれぞれサオリーナで開催し、メッセと武道館は売店などのおもてなしゾーンや関係者の控え室などに活用することが可能になりました。

なぎなた競技の開催を予定していた久居体育館は、例年ジュニア向けに体験教室が開催されるなど、なぎなたのホームともいえる会場です。これまでなぎなたのインターハイや国体の東海ブロック予選会など各種大会が開催されてきましたが、国体本番では直前に300人規模の選手が体育館に集合し1時間半の間に競技用具検査を済ませる必要があります。アップ場や控え室は敷地内に大型の仮設テントを設営する予定となっており、このままでは密が避けられない状況でした。

津市国体局は、選手たちにとって馴染みの深い久居体育館から、あえてバスケットボールのサブ会場として予定されていた芸濃総合文化センターとの入れ替えを申し出ました。芸濃会場はアリーナ以外にも多目的ホールや剣道場、研修室などを配する大型拠点施設であり、ホールを控え室、剣道場をアップ場として使用することで密の解消に大きな効果が期待できるからです。

このように、津市開催の各競技団体から会場の入れ替えにご理解をいただいた結果、密を回避する広いスペースを提供できるようになっただけでなく、仮設の設営が不要になったことで荒天時の一時撤去などのリスク回避、会場設営期間の短縮、1億2,000万円程度の経費削減などといった副次的な効果ももたらされました。

津市会場では、他にも、競技別開会式の簡素化、人が集中する大型のテントに代わる小・中型テントの組み合わせ設置、ドリンクコーナーでの手渡しの回避など、感染防止対策を追求し徹底を図ります。

■三重県のチャレンジ

三重とこわか国体・大会全体としても、新しいスタイルが構築されつつあります。

昨年10月、三重県は総合開会式・閉会式の会場を三重交通Gスポーツの杜伊勢・陸上競技場から津市の三重県総合文化センター大ホールに変更することを発表しました。観覧者数を8,000人から300人に大幅に削減し選手はリモート参加にするなど、最新技術を駆使した史上初のオンライン式典の実施に向け着々と準備が進められています。

新型コロナウイルス感染防止策を幾重にも施し万全の体制で臨む国体の新モデルは10月23日～25日に開催予定の三重とこわか大会(第21回全国障害者スポーツ大会)にも引き継がれます。両大会のスローガンは「ときめいて人 かがやいて未来」。コロナ禍においても三重とこわか国体・大会がスポーツの喜びと感動をつなぎ希望のきらめきを放つ祭典となるよう、皆さまとともに全力で取り組んでまいります。